



き た の 祭

風鈴

先月末から茶屋町の御旅社では境内に風鈴を飾り、天神さまに涼音を捧げております。

風鈴は元々、寺院に見られる風鐸のように、魔除けの意味があり、風にのってやってくる病魔などを寄せ付けない為に軒先に吊るされたものですが、今は夏の風物詩となっています。(諸説あります)

チリンと鳴る音に被い清めの思いを込め、夏風邪に悩まされないうよう、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

お化け屋敷

夏といえば、肝を冷やして納涼感を得る為か、各地でお化け屋敷が人気です。この梅田でも茶屋町の毎日放送(MBS)の一階で「梅田お化け屋敷二〇一四 恐怖のかくれんぼ屋敷」が来月十五日まで一階で行われており、炎暑の中、多くの人々が絶叫を上げておられます。

そんなお化け屋敷ですが、実はこの大阪にはかつて、本物の化け物屋敷がありました。

文化年間の『金城見聞録』には「京橋口城代屋敷の怪」とあり、現在の大阪城の北、京橋口から極楽橋までの間の伏見櫓跡の近くで、この地にあった京橋口定番屋敷に住むと、高熱にうなされ、重病になって死ぬ者もいたとかで妖怪の仕業と忌避されていました。

享保十五年に戸田大隅守忠圀という人が赴任して来て、この屋敷に住み、化け物の正体として二・四メートルもある大狐を仕留めたとありますが、赴任の二年後の享保十七年に亡くなったという事から、きっちりお化けの祟りを受けたともいえないかもしれません。

現在この辺り一帯は建物も無く、通りから離れている事もあり訪れる人もまれで、往年の化け物屋敷の雰囲気のまま残っています。

今年の冬から来年にかけては大坂の陣四百年の節目でもあり、大阪城に注目が集まるでしょうが、こうした隠れた怖いところもあるのが、また大阪城の魅力なのかもしれません。

ゴジラにみる日米の神観念

先月二十五日、アメリカ版のゴジラが日本でも公開となりました。昭和二十九年の誕生から六十年を過ぎ、現在も日本が誇るキャラクターが世界で健在なのは嬉しい事です。さて、そんなゴジラですが、初代が制作されたその当時は相次ぐ原水爆実験による放射能汚染に社会的関心が高まっていた事もあり、ゴジラは娯楽映画というよりも、原水爆への恐怖を描く社会派映画の色が強く出ていました。と同時に、実はゴジラの色が強く出ていた。下地には神道の要素が深くありました。

この初代ゴジラでは、大戸島という島の船が巨大な何かに沈められ、不漁など奇異な事が続いた事から、高堂国典さん演じる長老が、大戸島の伝説の怪物「呉璽羅」の仕業と話をし、ここで初めてゴジラという語が出てきます。その後、村祭りで神楽が舞われるシーンでは、この神楽は昔、ゴジラを鎮める為に舞われたものだと言っているシーンがあり、初代のゴジラはヤマタノオロチの如き荒ぶる「神(カミ)」であり、原水爆に対する祟り神としての要素が根底に含まれていたように思えます。

今回のアメリカ版ゴジラでは、日本のゴジラの設定よりも古い古生代ベルム紀から生態系の頂点にある存在として、「神(ゴッド)」のようなものとして描かれています。

日本では「神(カミ)」の存在は八百万の神であり、ゴジラもひとつの祟る神という捉え方であり、その後、たくさんのお化けが出てきますが、欧米圏でいう「神(ゴッド)」は唯一絶対の存在と認識される事から、今回のゴジラは絶対的な存在とされています。

こうしたゴジラというキャラクターの描き方一つをとってみても、日本と欧米では神に対する捉え方の違いや、原水爆への考え方の違いが見られ、そうした視点で見ると、また深みが出て面白いものです。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀 知

